語源について　　第７回

前回に続き生活のなかに密着した言葉を中心に、語源について言葉を洗い出す。
“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

・数珠つなぎ：たくさんつながっていること。「数珠」には、玉がたくさんつないである。そこで、たくさんいっしょにつないであるのを「数珠つなぎ」と言ったわけ。「罪人が数珠つなぎになって連行された」「事故のたm、車が数珠つなぎに道に止まっている」
・唐突：だしぬけ。いきなり。突然。「彼のとった行動は全く唐突だ」「唐突な発言だった」「唐突に立ちあがる」のように、形容動詞として使う。「唐突」の本来の意は「ぶつかること」である
・泥仕合：みにくい争い。互いに相手の秘密や弱点、失敗などを暴露しあってみにくく争うことである。どろだらけになったきたない仕合の意であろう。「与党、野党の争いは全くの泥仕合だ」「学問上の論争がしまいには泥仕合になってしまった」
・お墨付き：後日の証拠になる文書。「墨付」は元来、墨のつきぐあい。筆跡のことであるが、転じて、武家時代に幕府や大名から後日の証拠としてその臣下などに与えた文書を言う。「将軍からお墨付きをもらう」などと使う。
今でも「総裁のお墨付きがあるから、今度は大臣まちがいなし」などと使う。
・えびでたいをつる：僅かのことで多くの利益を得る。えびのような小さなものをえさにして、たい(鯛)のような、りっぱなものを得ることである。
略して「えびたい」とも言う。「こんなに高価なものをもらって、これではえびたいだ」
・ふにおちない：なっとく出来ない。理解が出来ないこと。合点がてんが行かないこと。「政府のやりかたはどうもふにおちない」「調べてみるとふにおちないことばかりだ」などと使う。「ふ」は「腑」であって「はらわた」のことである。
転じて「心」の意に使う。「ふに落ちる」は「理解出来る」の意である。
・かいがいしい：きびきびしている。「エプロン姿もかいがいしい」「かいがいしく働く」のように使う。もとは「かひがひし」であり、「かひ」は「効果」の意の言葉である。しばしば、「甲斐甲斐し」と書かれるが、あて字である。
・しびれを切らす：待ちくたびれる。「いくら待っても来ない。しびれを切らしてこちらから出かけた」のように言う。待っていて、すわった足がしびれてしまうという気持ちから出た表現である。「しびれが切れる」も同じ意味。
・語弊がある：言い表し方が十分でない。特に用語が適切でないために誤解を招きかねないという気持ちで使う。「島国根性と言っては語弊があるが」のよ

うに使う。なお、「弊」は「弊害」の「弊」である。

・まんざらでもない：必ずしも悪くない。「なかなかよろしい」の意。「大臣になってまんざらでもなさそうだ」「まんざらでもない顔をしている」のように使う。「まんざら」は漢字で「満更」とも書いた。もともと副詞で「まんざらうそではない」「まんざら捨てたものでもない」のように「必ずしも」の意で使われたもの。

・便乗する：機会をうまく利用する。「品不足に便乗して値上げを計る」「人気に便乗する」などと使う。「便」には、「たより」「よいついで」の意がある。もと、車や馬などに便乗を得て乗ること、人の車や馬に乗せてもらうことで、「便乗者が一名いる」などと使う。

・言わずもがな：言わない方がよいこと。「言わずもがなのことをしゃべる」「そんなことは言わずもがなだ」などと使う。「がな」は願望を表す助詞。「なくもがな」の「がな」も同様である。なお、「言わずもがな」は「言うに及ばない」「もちろん」の意にも使われる。「味は言わずもがな、値段が手ごろだ」

・うつつをぬかす：夢中になる。物事に心を奪われて夢中になる。気をとられてうっとりとなる。「音楽にうつつをぬかす」「うつつをぬかして見とれる」などと使う。この場合の「うつつ」は「夢かうつつか」と使われるように、現実の状態、目ざめている状態を言う。

・あげ足をとる：人の言葉じりを問題にする。人の言いそこないなど取り上げてやっつける。「あげ足をとられる」「あげ足とり」などと言う。もと、相撲用語で、相手のあげた足を取って倒すことである。

・ものものしい：大げさだ。大層らしい。「ものものしい警戒ぶり」「ものものしい登山服姿」などと使う。「もの(物)」を二つに重ねて形容詞としたもの。「ことごとしい」も「こと(事)」を重ねて形容詞としたものである。

・てきめん：即座であること。まのあたりに効果や報いが現れることである。「天罰てきめん」「効果はてきめん」などと言う。「てきめん」は「覿面」と書く。「覿」は、見る意であって、顔をまともに見る意味である。もと、君主、または目上の人に対した時に言う語であると言う。

“語源のたのしみ” 岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。　　(池田)